

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷二十二第

行發日一月三年五十正大

論叢

「大學」に見はれたる經濟思想……法學博士 田島錦治

横濱及び神戸の開港事情……文學博士 三浦周行

國際營業の課税……法學博士 神戸正雄

統計による因果關係の研究……法學博士 財部靜治

理性と現實……文學博士 米田庄太郎

時論

勞働組合と月給取階級……法學博士 河田嗣郎

說苑

スミスの植民地觀に關して再び 矢内原教授に應ふ……法學博士 山本美越乃

スミスの植民地論につき 矢内原教授に答ふ……經濟學士 長田三郎

雜錄

合衆國における勞働銀行に就いて……經濟學士 松岡孝兒

(禁轉載)

理性と現實

(フッサール現象學の八 完結)

米田庄太郎

- (A) ノエマ的意義及び其の對象との關係
理性の現象學
(B) 理性論的問題の普遍性諸階段
(C)

(A) ノエマ的意義及び其の對象との關係。此の問題の考究に於て我々の先づ注目す可きは常に意義に對して、志向的體驗に對して「内容」と「對象」との區別が立てられるだけでなく、夫れ自身に於て見られたるノエマに對しても亦、此の區別が立てられねばならぬと云ふことである。そうしてノエマの「内容」とは即ち其の「意義」にして、ノエマは其の「意義」によりて「其の」對象に結び附けられるのである。考究を單純にする爲めに注意的諸變化を看過し、設定的諸作用にのみ限りて

考察するが、今かゝる見地から一の生きたる「我思ふ」を考察すると、夫れは其の本質上著しく對象性への「方向」を有することを見る。換言すれば其のノエマに、一定のノエマ的存在と共に、一の對象性が屬するのである。かくて各ノエマに於て、一の完全に確定されたる内質ズヤが明らかに具はつて居る。各意識は其の *Ways* を有し、「其の」對象的なるものを意味する。そうして各意識に於て我々は、其の意識のかゝるノエマ的記述を、「夫れが意味されて居るがまゝに充分に」成就し得なければならぬことは明白である。我々は解釋及び概念的把握によりて、形式的或は質料的、實質的に確定されて居る處の、或は又「確定されて居ない處の」諸賓位の完結せる一總體を獲得する。そうして其等の諸賓位は、其の變化されたる意義に於て、當面のノエマの對象中核の「内容」を規定する。

併し賓位は「或物」の賓位にして、そうして此の「或物」は當面の中核に共屬し、明らかに夫れと不可離なるものである。夫れはさきに述べし中心的統一點である。夫れは諸賓位の結合點或は「運載者」である。夫れは諸賓位と並存し、諸賓位から離さる可きものでないが、しかも必然的に諸賓位から區別さる可きものである。同一的志向的「對象」は明らかに、變化する又變化し得る「諸賓位」から區別される。夫れは中心的ノエマ的要素として區別され、「對象」、「同一的なるもの」、「其の可能的諸賓位の規定し得られる主位」(一切の賓位から抽出されたるX)にして、そうし

て其等の賓位、或は一層詳しく云へば賓位ノエマから區別される。

されば我々は各ノエマに於て、一の純粹對象的或物が一の統一點として存在し、そうしてノエマ的關係に於て、二種の對象概念が區別されねばならぬことを學ぶ。其の一は此の「純粹統一點」、此のノエマ的「率直對象」にして、其の二は其の「被規定性の如何いかにに於ける對象」、即ち如何にか規定されたる對象である。但し此の場合に規定するものは當面の作用にして、此の作用はかゝるものとして現實に其のノエマに屬する。そうして我々が屢々述べたる意義とは即ち此のノエマ的な「如何」に於ける對象と、さきに特性附けられたる記述が、夫れに於て明證的に見出し、概念的に表現し得る處のものとを合せて意味するのである。かくて意義に屬する意義運載者（空虚Xとして）と、諸意義の本質に基いて、何れかの階段の意義統一との合致的結合の可能性によりて、常に各意義が對象を有するのみならず、種々なる意義が同一の對象に結び附けられる。但しそれはまさしく其等の意義が、合致せる諸意義の規定し得られる諸Xが相互に、又當面の意義統一の全體意義と、相合同（die Deckung）する以上に於てある。尙ほ我々は意義と定言的或は措定的特性との統一を、命題プロポジション或は文章と云ふ。かくて單項的命題（知覺及び其他の定言的或は措定的直觀に於て見られるか如き）と多項的總合的命題（斷定的信仰的命題の如きもの）との區別が立てられる。そうして此の區別は、又感情命題、願望命題、命令命題等に於ても立てられる。此の如くに解すると、命題の概念は非常に擴大されるが、

併し一の重要な本質統一の限界を越えない。

却説是れまで論述せる處によりて學ばれる如く、各志向的體驗は一のノエマ、及び其の中に夫れが依て以て對象に結び附けられる一の意義を有するものであるが、之を逆に見ると、我々が對象と稱するものは總て意識の對象であることが悟られる。此のことはつまり、世界及び現實は一般的に何であり得ることも、現實的及び可能的意識に於ては、夫れに對應する意義或は命題によりて、代表されねばならぬ事を意味するので、かくて現象學的絶縁に附せられる實在的及び觀念的現實は、現象學的範域に於ては、夫れに對應する多様な意義及び命題の總體によりて代表されるのである。そうして對象と意識とは本質的に相結合するものなることは、是れまで述べし處によりて示されて居るのであるが、今此の兩者の本質的結合は何を意味し、又意味せねばならぬかを、更に詳しく研究せんとすると、我々は一の曖昧を感じてくる。そうして其の曖昧を突きつめて行くと、我々は我々の研究の一大轉回點の前に立つことを覺る。我々は一の對象に、「命題の多樣」、或は一定のノエマ的内實の諸體驗の多樣を歸屬させる、かくて其の對象によりて、同一化の諸總合が先天的に可能となり、又其等の諸總合の力に依て、對象は同一的なものとして存立するを得、且つ存立しなければならぬ。Xは種々なる作用に於て或は作用のノエマに於て、種々なる「規定内實」を具足して、必然的に同じものとして意識されて居る。併し夫れは「現實的」に同じ

ものであるか。そうして對象其物は「現實的」であるか。相互に共鳴し、更に直觀的に充實されることすらある諸命題が、意識的に流れ行く間に、其の對象は非現實的であり得ないであらうか。

意識及び其の流れの諸事實は、此處に我々の關心する事ではない。此處、肝要なるは、本質問題である。意識或は意識主觀は現實に對して判斷を加へ、現實に對して質問を起し、現實を疑ひ、其の疑ひを解決し、かくて「理性の判決」を下し、理性の裁判權を行なふて居る。されば我々は此の權利の本質、及び相關的に現實の本質を、先驗的意識の本質結合に於て、かくて純粹に現象學的に、闡明せねばならぬ。

(B) 理性の現象學 吾人が率直に對象と云ふ時には、普通に當面の實在範疇の現實な、眞實に實在する對象を意味して居る。そうして我々は對象に就て何を陳述するとも、其の陳述が理性的である以上は、其の際に「意味されたもの」として言表されたものは、「基礎附け」、「證示し」得られねばならぬ。論理的範疇、言表の範疇に於ては、「眞實である」或は「現實的である」と云ふこと、「理性的に證示し得られる」と云ふことは、根本的に相關々係を有するのである。

然らば理性的證示 (vernünftige Ausweisung) とは何を云ふか、即ち理性意識は何に於て成立するか。今此の問題を究明する爲めに、我々は幾多の實例を直覺的に體現し、之れに本質分析を施し始めると、直ちに幾多の區別が注目される。先づ第一に注目されるは、設定されたものが原

本的所與性に達する處の設定的體驗と、夫れがかゝる所與性に達しない處の設定的體驗との區別、かくて最廣義に於ての「知覺する」作用「見る」作用と、「知覺する」のでない作用との區別である。そうして此の區別によりて、我々は理性意識の第一基本形式は、原本的に與へる處の「見る」(das originär gebende "Sehen") 即ち洞見或は一般的に明證であることを學ぶ。洞見或は明證の骨髄は、理性設定と之を本質的に理由附けるもの (Motivierende) との統一である。

次に我々は洞見或は明證に就て、第二及び第三の區別を立てねばならぬ。第二の區別とは即ち個體的なるもの、實然的見る (das "assertorische" Sehen) と、本質或は本質關係の「必然的」見る (das "apodiktische" Sehen) 或は洞見との本質的區別、即ち實然的明證と必然的明證との區別である。(此處に注意して置きたいことがある。普通には明證及び洞見と云ふことは、同じく必然的洞見を意味するものとして、同義に用ひられて居るのであるが、我々は現象學上の重大なる一理由によりて、先づ實然的見ること、必然的見ること、を包括する、一の一般の言葉が必要とする。そうして我々は明證と云ふ語を、之れに當たていと思ふ。かくて我々は明證を實然的明證と必然的明證とに別つ、そうして洞見とは特に必然的明證を意味するものと解するのである。)

そうして第三の區別とは、充當的所與性と不充當的所與性との區別に結び附く處の、充當的明證と不充當的明證 (adäquate und inadäquate Evidenz) との區別である。各明證は充當的にして、根本的には最早「強め」らる可きでない、或は「弱め」らる可きでない、かくて重さの度を有しないものであるか、又は不充當的にして、随ふて強め得られ又弱め得られるものであるかである。そうして一の範域に於て、二種の明證の何れが可能であるかは、其の範域の類定型によりて定ま

る。かくて夫れは先天的に豫示されて居る。そうして一の範域例へは本質關係の範域に於て明證に屬する完全性を、之を本質的に排斥する他の諸範域に於て望むは、無理である。

以上述べたる三種の本質的區別によりて、理性意識は根本的に何に於て成立するかは、大體上學びられるので、要するに理性意識の第一の基本形式は、原本的に與へる處の見ることに、即ち明證にして、そうして明證は根本的に實然的明證と必然的明證、及び充當的明證と不充當的明證とに區別されるのである。今以上明證に就て論述したことは、全く理性意識の信仰範域の考察に基いて居るのであるが、併し明證は只信仰範域に於ける定言或は措定に關係するだけのものではなく、他の一切の定言的或は措定の範域、即ち感情定言の範域、及び意志定言の範域にも、又殊に其等の諸範域間に存する理性關係にも、かくて感情及び意志と理論的或は信仰的理性との交錯にも關係するものである。理論的或は信仰的真理或は明證は、價值論的及び實際的真理或は明證に於て其の平行線を有する。そうして夫れによりて後者の「真理」は、前者即ち信仰論的真理、特に論理的真理に於て、表現及び認識に達するのである。されば其等の諸問題の取扱に對して、信仰的定言を一切の他の設定種類即ち感情及び意志の設定に結び附ける本質關係、更に一切の信仰的諸様式を原信仰ウマドクダに還元する本質關係に關する研究が、基礎的であらねばならぬことは云ふまでもない。又まさしく夫れによりて、何故に信仰確實性或は原信仰、及び之れに對應する真理が、一

切の理性に於て甚だ重要な役目を演ずるかは、最後の根柢から理解さる可きである。尙ほ其の役目は同時に、信仰的範域に於ける理性の諸問題の解決は、價值論的及び實際的理性の諸問題の解決に先立たねばならぬことを、自明的に理解させるのである。

却說理性（最も廣き、一切の設定種類、隨ふて價值論的及び實際的設定種類をも包括する意味での理性）の一般の本質理解によりて、眞實なる實在の觀念を眞理、理性、意識等の諸觀念と結合する本質相關關係の一般的闡明は、自から獲得されねばならぬ。此處に一の一般的洞見が直ちに生まれてくる。夫れは即ち管に「眞實に實在する對象」と「理性的に設定さる可き對象」とが、等同的相關者であるだけでなく、更に「眞實に實在する對象」と、一の原本的な完全な理性措定或は定言に於て設定さる可き對象とが、等同的相關者であると云ふことである。此の理性措定に對しては、對象は只不完全に、單に一方面的にのみしか與へられないであらう。質料として其の根柢に存する意義は、規定し得られるXに對して、把捉的に大體上表示されたる何れの方面に於ても、或物を規定されず捨て置かないであらう。理性措定は一の原本的な措定である可きであるから、夫れは其の理性基礎を、完全なる意義に於て規定されたもの、原本的所與性に於て、有しなればならぬ。此處にXは嘗に完全なる確定性に於て考へられるのみならず、更にまさしく此の原本的に與へられたる確定性に於て考へられて居る。要するに右の均等關係は、左の事を意

味するのである。即ち各「眞實に實在する」對象に、對象其物が原本的に、更に完全に充當的に把握し得られる一の可能的意識の觀念が、原則的（無制約の本質普遍性を有する先天的なるものに於て）に對應すると云ふことである。但し逆に、此の可能性が確定されて居る場合には、對象は自から眞實に實在するのである。

併し此處に注意す可きは、右の等同關係はカントの意味での觀念として、解さる可きものなることである。完結せる顯現或は完結せる意識に於ては、對象は只不充當的に顯現し得るだけである、或は只不充當的に知覺し得られるだけである。對象は如何なる完結せる意識に於ても、完全なる確定性に於て、又まさしく同様に完全なる直觀性に於て、與へ得られない。併し觀念としては、完全なる所與性は大體上表示され得るのである。即ち連續的顯現の無限的諸過程の、其の本質定型に於て絶對的に規定されたる體系として、或は此等の諸過程の分野として、種々なる併し確定せる諸次元を有する處の、そうして確乎たる本質法則性によりて全く支配される處の、諸顯現の一の先天的に規定されたる連續體 (Kontinuum) が、大體上表示されて得るのである。

此の連續體は更に詳しく左の如く規定される。即ち夫れは總ての方面に於て無限的にして、其の總ての階段に於て同一の規定し得られるXの諸顯現より成立し、かくて同一のXの何れの各線も、不斷の流れに於て一の共鳴的顯現結合（夫れ自身は進動的顯現の統一として表示さる可きも

の、そして夫れに於ては同一の常に與へられたるXが、連續的共鳴的に「益々詳しく」規定され、決して「他の仕方では」規定されない」を産出する様に、結合的に整頓され、本質内容に従ふて規定されたものである。今右の流れの完結せる統一、かくて有限的なる、只可動的なる作用は、右の連續體の總方面的無限性の爲めに考へ得られないとするも、しかも此の連續體の觀念、及び此の連續體によりて大體上表示されたる完全なる所與性の觀念は、洞見的に存立する。それは一の觀念が、其の本質によりて一の特有の統一定型を表示しつゝ、洞見的であり得るとまさしく同様に、洞見的であり得るのである。一の本質的に理由附けられたる無限性の觀念は、夫れ自身一の無限性でない。併し此の無限性は根本的に與へ得られないと云ふ洞見は、此の無限性の觀念の洞見的所與性を排斥するのではなく、寧ろ之を要求するのである。

かくて眞實にあると云ふ本質は、充當的に與へられる及び明證的に設定し得られると云ふ本質と、相關的に等値であると云ふことは、最早毫も疑はれない。併し其の與へられると云ふことは有限的所與性の意にか、又は一の觀念の形式に於ける所與性の意味にか、何れかに解される。そうして前者の場合に於ては、實在は「内在的」實在、完結せる體驗として或はノエマ的體驗相關者としての實在である。後者の場合に於ては、實在は超越的實在、即ち其の「超越性」がまさしくノエマ的相關者(實在が實在質料として要求する處の)の無限性に置かれて居る處の實在である。

與へる處の直觀が充當的及び內在的である處では、意義と對象とが合致するのでなく、原本的に充實されたる意義と對象とが合致するのである。此處では對象は、まさしく充當的直觀に於て、「原本的夫れ自身」として把握され、設定されて居るものにして、其の原本性の力によりて洞見的、又其の意義完全性及び完全なる原本的意義充實の力によりて、絶對的に洞見的である。然るに與へる處の直觀が一の超越する直觀である處では、對象的なるものは充當的所與性に達し得ない。只かゝる對象的なるもの、觀念、或は其の意義及び其の「認識の本質」の觀念、かくて不充當的經驗の法則的無限性に對する一の先天的規則が、與へ得られるだけである。

却説以上述べし處によりて見れば、理性の現象學、即ち意識一般でなく、特に理性意識を直覺的探究に附せんとするノエチク (die Noetik) は、一般的現象學を前定するものなることは明白である。各類の措定的或は定言的意識は規範の下に立つと云ふことは、一の自明なる現象學的事實にして、そうして規範は、其の種類及び形式に従ふて嚴密に分拆され、記述さる可き一定のノエジスのノエマ的聯結に關する本質法則に外ならぬ。云ふまでもなく「不理性」は、何處にありても理性の消極的反對方面として考察さる可きものにして、夫れは恰かも明證の現象學が、其の反對方面即ち妄誕 (die Absurdität) の現象學を含むが如くである。そうして明證の一般的本質論は、其の最普遍の本質區別に關する諸分拆と共に、理性の現象學の基本的であるが、併し比較的に小

さき一部分をなすものである。かくて明證に關する種々なる解釋に反對して我々の立てたる見解は、益々確かめられる。

明證は判斷に附着して、よりよき世界からの一の神秘的な聲の如く、「此處に眞理がある」と我々に叫ぶ處の、何等かの意識指標ではない。現象學的に探究すると、此處ではノエマの本質學的に規定されたる本質構成に屬する處の、一の特有なる設定様式が取扱はれて居ることが、最も明白に認識される。更に本質法則が此の勝れたる構成を有しない處の設定的作用と、之を有する處の設定的作用との關係を規制すること、例へば夫れは「志向の充實」の意識、措定的諸特性に結び附く處の、正當とすること及び強めること、并に夫れに對應する處の不當とすること及び弱めることとの反對特性意識の如き、或物を與へることが認識される。尙ほ又論理的諸原理は深き現象學的解明を要すること、例へば矛盾の原則は可能的確かめること及び可能的弱めることの本質結合に、吾人を導き行くことが認識される。一般的に我々は、此處では何處にありても、偶然的な事實が取扱はれて居るのでなく、本質的聯結中にある本質的出來事が取扱はれて居ること、及びかくて本質に於て起る事は、事實に對して絶對的に打ち勝ち難き規範として、作用することを洞見する。我々は此處に又左の事を明らかに學ぶ。即ち各設定的體験は同じ仕方にて明證的であり得ないこと、殊に各設定的體験は直接に明證的であり得ないといふこと、更に理性設定の一切の仕

方、直接明證或は間接明證の一切の定型は、現象學的聯結に根ざすと云ふことである。

殊に肝要なるは總ての範域に於ける連續的同一性合致及び總合的同一化を其の現象學的構成に従ふて研究することである。我々は先づ第一になさねばならぬ事の一、即ち一切の普遍的諸構に從ふて志向的諸體驗の内部的造營、此等の諸構造の平行、ノエマに於ける諸成層（意義、意義主體、措定的諸特性、充實の如き）を知ることを學んだとすると、此處に一切の總合的諸合致に就て、如何に之れを以て管に一般的に作用諸結合が起るか云ふだけでなく、更に一の作用の統一への結合が起るか云ふことを、完全に明らかにすることが肝要である。殊に如何に同一化する合致が可能であるか、如何に繰り返し繰り返して、規定し得られるXが合同ゾッペンに達するか、如何に此の際意義規定及び其の空虚姿勢が、即ち此處では其の不確定要素が振舞ふか、同様に如何に充實夫れと共に高低意識諸階段に於ける強めること、證示すること、進歩的認識の諸形式等が、明亮性及び分拆的洞見に達するかを、究明することが肝要である。

併し其等の又總ての平行的な理性研究は、全く「先驗的」立場、現象學的立場に於て行はれるのである。此處に下される何れの判斷も、自然的現實の措定を背景として前定する自然的判斷でない。それは現實意識、自然認識、自然に關する價值諦觀及び價值洞見の現象學が遂行される處でも、自然的判斷でない。何處にありても我々はノエジス及びノエマの諸形成を探究し、一の組織

的及び本質的形體學モルフォロジーを工夫し、何處にありても本質必然性及び本質可能性を究明する。「對象」は我々にとりては、何處にありても、意識の本質聯結に對する稱號である。夫れは先づノエマ的Xとして、意義及び命題の種々なる本質定型の意義主體として現はれる。夫れは更に「現實的對象」の稱號として現はれ、そうして一定の本質的に考察されたる理性結合(夫れに於て、夫れの中に意識の理性的設定を受けるのである。)の稱號である。

規定されたる、本質的に限定されたる、そうして本質探究に於て固定さる可き、「目的論的に相屬する意識諸形成の諸部類に對する諸稱號は、「可能的對象」、「蓋然的對象」、「疑はしき對象」等の諸表現である。そうして此等の表現に於て、聯結は常に相異なつて居るので、夫れ夫れ其の他と異なる性質に於て嚴密に記述さる可きである。かくて例へばこれと規定されたるXの可能性は、常に此のXの其の意義成分に於ける原本的所與性によりて、かくて現實性の證明によりて證示されるのみならず、更に單なる復現的に基礎附けられたる不合理的な諸要求も亦、相合致する諸結合に於て相互に強め得られるものなることは、容易に洞見さる可きである。同様に、疑はしきことは、一定の記述的形成の様式化されたる諸直觀の矛盾現象に於て證示される。そして又之れに理性論的諸研究(物件・價值・實際的諸對象の區別に結び附けられ、此等のものに對して構成される處の意識諸構成物を探究するもの)が結び附けられる。かくて現象學は夫れが

絶縁する處の全自然的世界及び一切の觀念的諸世界を現實に包む。夫れは「世界意義」として其等の諸世界を、本質法則(對象意義及びノエマ一般を、ノエジス)によりて、殊に理性法則的本質聯結(其の者ハ「現實的世界」にして、かくて夫れ自身は夫れ夫れの場合に於て、目的論的に統一的なる意識諸形成の完全に規定される體系に對して、一の指標を表示する處の)によりて包むのである。

(C) 理性論的問題論の普遍性階段 理性の現象學の問題論に關する我々の思索は、是れまでは普遍性の一の高さの中に動いて居たので、そうして此の事は問題の本質的支分、及び夫れと形式的並に領域的本體學との聯結を、明らかにさせなかつたのであるが、今や我々は此の點に就て詳しく究明せねばならぬ。又夫れによりて始めて、理性の現象學的本質論の完全なる意義、及び其の問題の全體の豊富が、明らかに示されるのである。

夫れ理性の一般的現象學は、我々が更に理性特性に對して決定的なる構造的區別、即ち措定或は定言の基本種類に従ふての區別、率直措定と基礎附けられたる或は建設されたる措定との區別、及び之れと交叉する處の單項的措定と多項的措定即ち總合との區別等に注目する時は自から幾多の部類に支分する。そうして理性問題(明證問題)の主要部類は、措定の主要類、及び之れによりて本質的に要求される設定質料に結び附けられる。云ふまでもなく第一位に置かれるは、原信仰、信仰の様式(之れに對應する實在様式を伴ふて)である。

我々はかゝる理性論的目的を追求するに於て、必然的に形式的論理學及び之れと平行する諸學

科、即ち形式的價值論及び實行論と稱せらる可きものの、理性論的闡明の問題に到達する。

先づ命題殊に總合的命題の純粹形式論に關するさきの論述を顧るに、其等の形式論に於ては、總合的命題は理性妥當或は不妥當を問題とすることなく、ノエマ的に其の純粹形式に従ふて論じられて居る。かくて其等の形式論はまだ理性論の層に屬しない。然るに我々は理性妥當或は不妥當の問題を、命題(一般に夫れが全く純粹形式によりて規定されて居ると考へられる以上)に對して呈出すると、我々は形式論理學及び上に舉げし形式的平行諸學科の範圍内に入る。そうして總合的形式の中に、其等の學科の本質法則に於て表現される可能的妥當性の先天的條件が、存在するのである。殊に斷定的(分析的)總合の純粹形式の中に、信仰的理性確實性の先天的條件、ノエマ的に云へば可能的真理の可能性の先天的條件が存在する。そうして最狹義の形式的論理學即ち「判斷」の形式的論理學が、其等の先天的條件を客觀的に表示するのである。

右に述べし事は、感情及び意志の範域に屬する總合並に其のノエマ的相關者に對しても適用される。實に此等の範域の純粹總合形式に於て、價值論的及び實行の真理の可能性の條件が存在するのである。そうして此處に「客觀化」(例へば感情作用に於て行なはれる處の)によりて、一切の價值論的及び實行の理性的性質は、我々に理解し得られる仕方にて、信仰的理性的性質に、又ノエマ的には眞理に、對象的には現實態に、化成する。

今總て此等の聯結と、特有な又甚だ重要な現象學的研究が自明的に結び附いて居る。上に述べしが如き形式的諸學科の特質附けの仕方は、既に現象學的にして、我々の分析から多くのものを前定して居る。現象學は直覺の源泉を先驗的に純化されたる意識に於て遡求することによりて、我々が時として眞理の形式的條件、又時として認識の形式的條件と云ふ場合に、本來其の中に何が存するかを、始めて我々に理解させるのである。一般的に現象學は、認識、明證、眞理、實在(對象、事態等)等の諸概念に屬する本質及び本質關係を闡明し、判斷作用及び判斷の構成、ノエマの構造が認識を規定する仕方、其の際「命題」が其の特殊な役目を演ずる仕方、更に其の認識的「充實」の種々なる可能性等を理解することを教へる。現象學は又如何なる充實仕方が、明證の理性特性に對する本質條件であるか、明證の如何なる種類が當面に問題とされるか等を示し、殊に論理學の先天的眞理に於て、命題の直覺的充實(夫れによりて對應する事態が、總合的直觀に達するのである)と、命題の純粹總合的形式(純粹論理的形式)との間の本質聯結が取扱はれること、及び同時に其の可能性は可能的妥當の條件であること等を、吾人に理解させるのである。

現象學は又此處に、ノエジスとノエマとの相關關係に對應して、二重のものが區別せらる可きことを教へる。形式的文章論(例へは推測式論)に於ては、ノエマ的命題としての判斷、及其の「形式的眞理」が論ぜられる。此處では立場は全くノエマ的である。併し他方形式的文章論的ノエ

チク(ノエジス論)に於ては、判斷の理性的性質、正當性が論究せられ、此の正當性の規範が實に命題の形式との關係に於て論究される。そうして現象學的聯結に於ては、此等の平行が直ちに理解される。ノエジスに關する出來事、判斷作用、及びノエマに於て夫れど本質的に對應するもの、即ち命題、判斷等は、まさしく其の必然的相互關係に於て、又完全なる意識組み合せに於て研究されるのである。以上述べし事は云ふまでもなく、ノエジスの及びノエマ的規制の平行に關して、餘地の形式的諸學科にも適用されるのである。

我々は之より右の諸學科に對應する形式的諸本體學に目を轉じて考察するが、此處に兩者の聯結は、各作用内に於て成就され得る一般的可能的注視轉向によりて、既に現象學的に與へられて居るので、其の注視轉向か注視の中に齎らす諸存立は幾多の本質法則によりて、相互的に組み合はされて居るのである。第一次的な立場は對象的なるものに對する立場にして、そうしてノエマ的反省はノエマ的存立へ、ノエジスの反省はノエジスの存立へ導く。此等の存立よりして、此處に我々か取扱はんとする諸學科は抽象的に純粹形式を引き出す、即ち形式的命題論はノエマ的形式を、平行するノエチク(ノエジス論)はノエジスの形式を引き出す。そうして此等の諸形式が、相互に本質法則的に結合されて居る如く、兩者は本體的形式(本體的存立に注視を轉向することによりて、把握し得られる)と本質法則的に結合されて居るのである。

各形式的論理的法則は等同的に一の形式的本體學的法則に轉化さる可きである。かくて今や判斷に關する代りに事態に關して、判斷項(例へば名目的意義)に關する代りに對象に關して、實位意義に關する代りに對象特徴に關して、判斷されるのである。又我々は最早真理、判斷命題の妥當性を論せずして、事態の存立、對象の實在等を論するのである。更に此の轉向の現象學的內實も亦、夫れを決定する諸概念の現象學的內實に遡りて、闡明さる可きことは明白である。

更に形式的本體學は、かゝる形式的命題論の真理の單なる轉化の範域を越へて、遙かに進み行く。そうして「名目化」によりて、廣大なる諸學科が發展する。例へば複數判斷に於ては複數は複數措定として現はれ、そうして名目化する轉向によりて、夫れは集合と云ふ對象となる。かくて集合論の基本概念が發展する。集合論に於ては、集合は性質、關係等の特有の種類を有する對象として判斷されるのであるが、同じ事は數學的諸學科の基本概念としての關係、個數等の諸概念に就ても云ひ得られる。我々は命題の純粹形式論に於ての如く、此處に再び云はねばならぬことは、其等の諸學科を發展させ、かくて數學、推測式論等を研究することは現象學の任務でないこと云ふことである。只其等の學科の公理が現象學を關心せしめ、其等の公理の概念的事態が、現象學的分析に對する稱號として取扱はれるだけである。

以上述べし事は自から、形式的價值論及び實行論にも、亦理論的に希望されるものとして其等

の學科に從屬する處の、價值、財等の形式的本體學にも、約言すれば感情意識及び意志意識の相關者たる本體的諸範域全體にも適用されるのである。

却說形式的諸學科が我々に呈出する理性論的諸問題を論じたる後、我々は質料的諸學科、先づ領域的本體學に移らねばならぬ。夫れ領域的類によりて規定されたる對象は、夫れが現實的である以上あるがまゝで、其の先天的に大體上表示されたる本質を有し、其等の本質は知覺さる可き、一般に明かに又暗く表象し得らる可き、考へ得らる可き、證示し得らる可きものである。かくて我々は再び、理性的性質を基礎附けるものに關して、意義、命題、認識的仕方等に立ち歸る。併し今は純粹なる形式に立ち歸るのでなく、其の規定内容が其の領域的被規定性に於て解せられる處の命題(此處では我々は領域的及び鐘時的本質の質料的普遍性に注目する故に)に立ち歸る。此處に各領域は一の特有な、完結せる研究部類に對する導線ライト・アーチを與へるのである。例へば實質的物と云ふ領域を、導線とすることする。我々は此の導線が意味する處のものを正當に理解するならば、夫れと同時に一の廣大な又比較的に完結せる現象學的學科を決定する處の、一の普遍的問題を攬む。即ち夫れは先驗的意識に於ける物領域の對象性の普遍的「構成」の問題、或は約言すれば「物一般の現象學的構成」の問題である。又それと共に我々は、此の導線問題に屬する研究方法を學ぶのである。そうして同じ事は各領域、及び其の現象學的構成に關する各學科に就て、云ひ得られるのである。

夫よりフツツール氏は物領域を例として現象學的構造の問題を論述して居るが、先づあるがまゝの物直觀が夫れ自身の中に藏有する無限性或は物の觀念、及び夫れが無限性の次元に於て夫れ自身の中に藏有するものを、最大普遍性に於て究明したる後先驗的導線として物領域を論述し、又物の先驗的構成の諸層を論じ、更に先驗的構成の問題が物領域より如何に其他の諸領域に移されるかを論じて居る。そうして其の所論は同氏の現象學的研究の何たるやを具體的に理解する爲めに、甚だ肝要なるものであるが、此處には最早紙面の餘白なき故、省略する。そうして終りに最後の二節「先驗的問題の完全なる擴張」研究の調節」の概要を述ぶるに止める。

今現象學的構成の問題に關して、可能として認められ又要求される諸研究の範圍が、如何に廣大なるものであるかを明らかにする爲めには、少なくともさきに普遍的意識構造の問題論に關して行へるが如き方法を要するであらう。そうしてそれは本書次卷に於て企だてることゝするが、併し此處でも既に左の點だけは明らかにして置きたい。即ち構成問題に於ては一の重大なる問題が取扱はれ、そうして一切の實質的學問の、眞の意味にて、總て根本的なるものに關する研究諸領域が、開示されると云ふことである。其の「根本的なるもの」とは、つまり基本概念及び基本認識に從ふて領域的諸觀念の周圍に集められ、又夫れに對應する領域的諸本體學に於て、其の組織的展開を見出し或は見出さねばならぬものに外ならぬ。

右に述べし事は、我々が構成の觀念を適當に擴大するに於ては、自から質料的領域から形式的領域及び夫れに屬する本體學的諸學科に、かくて一切の原理及び原理學に推し移される。そうし

て此の際構成的研究の範圍は大に擴張され、遂には全現象學を包括し得るに至るのであるが、此の事は我々が次の考察を加へる時には、白から明らかになつてくる。

第一に對象構成の問題は、可能的なる、原本的に與へる處の意識の多様に、結び附けられる。約言すれば我々は先づ、純粹なる「表象」の範域内に活動する。併し夫れと對應する探究が、夫れと結び附けられる。其の探究とは即ちより高等な、狹義に於て「悟性範域」或は「理性範域」と稱せられるもの、作業に關するものである。かくて吾人は、先づ一元措定的作用に於て與へられたる（或は觀念に於て與へられたと考へられたる）對象を、總合的操作の活動に附し、夫れによりて益々高き階段の對象（全體の措定の統一に於て幾多の相離れる質料を包有する）を構成し得るのである。そうして此の際其等の操作の根柢に、客觀化のより低き或はより高き階段の、一部分は直觀的な、一部分は非直觀的な、場合によりては全く混亂せる諸作用が行はれて居る。暗黒或は混亂の場合には、吾人は總合的「構成物」を明かにし、其等の構成物の可能性の問題、「總合的直觀」によりて其等の構成物を受け戻すことの問題を呈出し、或は又其等の構成物の現實性の問題、顯明な且つ原本的に與へる處の總合的作用を以て、場合によりては間接的「推論」或は「證明」の仕方にて、其等の構成物を受け戻し得ることの問題等を呈出することを目的となし得る。現象學的には、總合の此等の總ての定型は、夫れに於て「構成されたる」總合的對象と相關を係に於て一の研究に附せらる可き

である。かくて我々は此處にも亦「構成問題」を有するのである。

(今論理的總合は率直質料(意義)を有する最低指定に基いて立てられて居るが、併し夫れは總合的階段の本質法則性、殊に理性法則は、總合的諸項の特殊質料から獨立して居ると云ふ仕方にてある。そうしてまさしく夫れによりて、一般的及び形式的論理學(論理的認識の「質料」から抽出し得る普遍性に於て考ふる)が可能となる。かくて構成に關する研究は又、形式的根本概念に結び附くが、只之を理性問題或は現實性問題及び眞理問題の「導線」としてとるだけの研究と、さきに述べし研究、(即ち領域的基本概念に、殊に先づ領域の概念其物に、如何にしてかゝる領域の個體的なるものが所與性に達するかを問題として結び附く處の研究)とに分たれる。

右に述べし事は、明らかに一切の作用領域及び對象領域に移される、かくて又其の構成に對して、感情作用が種相的指定及び質料を以て、先天的に責任を有す可き對象に移される。そうして夫れを、更に形式及び質料的特殊性に従ふて解明するは、對應する現象學の重大なる、殆んど豫感されなかつた、況んやまだ着手されなかつた任務である。

これによりて又、構成的現象學と先天的本體學及び結局一切の本質學的諸學科との内面的關係は明白になる。形式的及び質料的諸本質論の階段順は、一定の仕方にて構成的諸現象學の階段順を大體上表示し、其等の現象學の普遍性階段を規定し、本質學的及び質料的本質學的基本概念并

に基本命題に於て、之れに「導線」を與へる。例へば自然の本體學の基本概念、即ち空間、時間、物質及び其の直接派生物の如きものは、物質的事物の構成意識の諸層に對する指標にして、又夫れに屬する原則は其等の諸層に於ける且つ其等の層間の本質聯結に對する指標である。そこで純粹論理的なるもの、現象學的解明は、純粹時間論、幾何學及び總ての本體學的諸學科の一切の間接命題が、先驗的意識及び其の構成する多様の本質法則性に對する指標であること、又何故にそうであるかを、明らかにするのである。

併し明らかに注意されねばならぬことは、右の構成的諸現象學と、對應する形式的及び質料的諸本體學との聯結に於て、後者によりて前者を基礎附けると云ふ意味は、全く存しないと云ふことである。現象學者は本體學的概念或は命題を、構成的本質聯結に對する指標として認識し、夫れに於て直覺的諸證示(全く夫れ自身の中に其の權利及び其の妥當性を有する處の)に對する一の導線を認めることも、決して本體學的に判斷しないのである。

構成問題の總方面的な、同様な仕方にてノエジスの及びノエマ的意識諸層を考慮する解決は、明らかに理性の完全なる現象學(理性の一切の形式的及び質料的形態に於て、同時に其の不正當的即ち消極的理性的形態并に其の正常的即ち積極的理性的形態に於て考察されたる)と同値であるであらう。更にかゝる完全なる理性の現象學と現象學一般とは相合同するであらうと云ふ思想、又對象構成と云ふ總稱號によりて要求されたる一切の意識記述の組織的遂成は、一切の

意識記述を一般的に夫れ自身の中に包有せねばならぬであらうと云ふ思想が、自から吾人の頭裡に現はれてくるのである。

却説余は始め極簡単にフッサールの現象學的思想の概要を述べる積りであつたが、それでは現代哲學を論究する著作に於て、普通に説述されて居ること以上に進むことが出来ないから、又それだけでは現象學と社會學との關係を深く理解することが出来ないから、更に今日現象學的な考へ方を社會學に輸入せんとする社會學者中には、どれだけ眞に現象學を理解して居るのか疑はしい様な人々もあるから、之をかなり詳しく述ぶことは、少なくとも社會學や其の他の社會的學問を専攻する我國の學生に對して有益であらうと信じ、本雜誌數回に亘りて之を試みたのである。併し是れまで述べ來りし事を顧みると、自分の目的を達するには尙ほ不充分なる點を處々に發見する。それで余は目下準備しつゝある拙著「現象學と社會學」に於ては、更に改めて一層平易に且つ詳しく論述したいと努力して居るのである。尙ほフッサール氏の現象學に就ては、余は色々疑問を起して居るので、そうして其等の疑問に結び附けて推究して行くど、フッサール氏の現象學も、一見すれば大に其の立場を異にするが如く思はれるカントの認識論と、同様な困難に結局は陥るのでないかと思はれる。フッサール氏はカントの立場と自分の立場とは、全然異なるものゝ如く考へられて居る様であり、現に我國の或留學生に對して、カント的僻見を全然脱却するに非らずは、自分の哲學を理解することは不可能であると云はれたと聞いて居る。なるほどフ

ツサール氏の出發點は大にカントの夫れとは異なつて居る。併し同氏は色々迂回した上で矢張りカントと同様な困難に打突かり、そうして其の困難を打破すると云ふ點に於ては、カント以上に一步、進んで居ないと思はれる。そうして其の點に注目してフッサール氏の哲學を批判的に吟味して行くと、余はリッケルト氏一派の哲學に、新しき意義を見出すことは出来るかと思ふ。それで此等の問題に就ては余は上に擧げし拙著「現象學と社會學」中に詳しく論述するつもりであるから、此處には省いて置く。(但し右の拙著は近々に出版したいつもりで、目下其の爲めに全力を注いで居るのである)。そうして余は是れより更にフッサール氏の社會學論を考究したいと思ふ。

さきに述べし如く、今や社會學及び其の他の社會的學問上に現象學的方法を適用して、新生面を開拓せんとする計畫は續々現はれて居るのであるが、併しフッサール氏自身は少なくとも今日までに公にされた著述上では、まだ社會學論を組織的に論述されて居ない。しかも同氏の著述を注意深く熟讀して行くと、簡單で又斷片的であるが、直接社會學論に論じ及ばされて居ることが處々に發見される。それで余は其等の個所を拾ひ集めて總觀し、又同氏のまだ出版されて居ない講義「精神と自然」を參考し、更に同氏の學問論の主旨から推察して、同氏自身が既にどれほどまで社會學論を論述されて居たかを考究して見たいと思ふ。そうして先づ此の考究を遂成した上で、マックス、シユラー氏やシユタイン氏やクラカウエル氏やヴァルター氏やザンダー氏などの社會學論を考究することゝする。